

# かぐらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 102 号

平成12年 3月24日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 施設課 長島 章)

春待つ丘

卒業生を送るにあたって……………久保 良彦…2	
第22期生を送るに当たって……………石川 睦男…3	
「第1期生への手紙」……………野村 紀子…4	
「卒業にあたって」……………鴨嶋 雄大…5	
私が卒業を迎えられるのは……………久米 容子…5	
「発散と収束と」……………大藏 暁正…6	
医学科第22期卒業生名簿……………6	
「卒業にあたって」……………大森 真希…7	
「卒業にあたって」……………永田 恭子…7	
看護学科第1期卒業生名簿……………8	
平成11年度博士学位記受領者名簿……………8	
退官にあたり教官の総合的業績評価を 考える……………松嶋 少二…9	
守拙求真……………東 匡伸…10	
退官にあたって……………奥野 晃正…11	
細胞・DNA・蛋白の狭間で……………鈴木 裕…12	
教授就任挨拶-全人医療と予防医学-…吉田 貴彦…13	

就任のご挨拶……………高橋 雅治…14
1年を振り返って……………後藤 祐也…15
1年を振り返って……………高見麻衣子…15
北海道での1年を振り返って……………酒見 佳奈…16
1年を振り返って……………吉永ひいな…16
OSCEと臨床実習……………和田 直樹…17
OSCEを終えて……………節家麻理子…17
退職にあたり開設当時を振り返って…玉川 憲子…18
研究室紹介……………内科学第三講座…18
「新歓合宿」のお知らせ……………新歓実行委員会…19
学生証兼ネームカードのID化に伴う学生証の更新について…19
平成12年度日本育英会奨学生の募集について…19
平成12年度前期分授業料免除及び延納・分納について…19
平成11年度1年のあゆみ……………20
学生団体の設立・継続届けについて……………22
教官の異動……………22
窓 外……………稲葉 雅史…22



## 卒業生を送るにあたって

学 長 久 保 良 彦

医学科第22期生103名、看護学科第1期生61名、並びにご父母の皆様にも、医学士並びに看護士の学位取得のお祝いを申し上げます。

医学科は第22期生103名を加え、今年で2,315名の卒業生を社会に送り出したこととなります。そのほぼ7割が道内、残りは本州あるいは海外において、医療に従事するほか、医学教育あるいは研究者として、さらには保健・福祉行政に関わり、活躍しております。

本学と同様、地域医療の充実を目指して設置された医科大学の中で、このように70%を越える卒業生がその地域社会に貢献している例は他になく、特記されるべきことであります。皆さんはその点を大いに自負し、先輩に続いていただきたいと思えます。

看護学科第1期生61名の皆さんは、まさに看護学科のトップランナーであります。皆さんは本学教職員とともに、冬山登山のように新雪をラッセルし、新たな道を拓いたのです。この開かれた新しいルートは、断えることなく続く後輩達によって踏み固められ、旭川医科大学看護学科の伝統が築き上げられることとなります。

当然のことですが、これから社会に出て活動する中、良きにつけ悪きにつけて「旭川医大看護学科第1期生」が付いて廻ります。卒業の喜びをよく噛み締めるとともに、このようなまたとない巡り合わせをしっかりと胸に受けとめ、誇りを持って活躍されるよう、念願して止みません。

さて、次の21世紀は生命科学の世紀と言われ、その進歩は目を見張るものがあります。その生命科学を基盤とする医学では、遺伝子治療の可能性に大きな期待が持たれ、医学における第4の革命を迎えると言われているとされています。

このような遺伝子レベルの研究は、ある病気に対して普遍性のある理解を深める一方、その病気を持つ患者がいかに多様であるかということも明らかにしてくれることになりましょう。

医学は不確実性の科学 (Medicine is a science

of uncertainty, and art of probability-W. Osler) と言われてきました。この不確実性は主に患者すなわち人間の持つ多様性によるものと考えられます。

遺伝子レベルの研究により、人間の持つ多様性に対する理解が深まり、医学の不確実性が大幅に改善される希望が持てる時代、すなわち、より行き届いた医療ができる時代に向かって、皆さんは巣立ってゆくこととなります。

新しい世紀を目前にして、いま一つの話は、情報通信技術 (Information technology, I. T.) の目覚ましい革新です。時々刻々地球が縮んでゆく感さえいたします、いわゆるグローバルゼーションは、インターネットというような新しい媒体を介して、瞬時に世界中どこにでもアクセス出来る技術の進歩によりもたらされていることはいうまでもありません。医学においてこのことは、各医療施設から医療従事者個人個人に至るまで、また国内はもとより国際的な規模で、それぞれの能力比較が迅速に行われることを意味します。

さらに、情報へのアクセスの隔たりは医療従事者ばかりでなく患者を含めたすべての国民の間で消失し、診療する側も、受ける側も、根拠となるデータベースにアクセス出来ることとなります。そのため、どのような理由でその診療あるいは検査をするのかということが、常に公の場で問われることになるでしょう。つまり、情報通信技術の発達は、人がまとっているいろいろな飾り物を剥ぎ取り、裸にしかねない力を持ち、これからはますます個人の能力が問われる時代になると思われれます。

21世紀に向け、科学技術の進歩はいよいよその速度を速めるものと思われれます。科学技術が進むほど失われがちになるのが、医の心：人をいとおしむ心です。この心を大切に育みながら、大いに自らを磨くよう努力してください。

皆さんの大成を心から期待しております。



## 第22期生を送るに当たって

医学科第6学年担当 石川 睦 男

第22期の諸君、卒業おめでとうございます。

長い学生生活終え、これから社会に旅立つという  
ことで期待で胸も膨らんでいることと推察します。  
いかなる時代においても、卒業は一つの区切りであ  
り、社会も、卒業生たちもその前途に希望をいただき  
ます。どうか、卒業の感激を忘れることなく、今後  
精進して立派な医療人となることを期待します。

さて、2000年を迎え医療、医学を取り巻く環境は  
激変してきています。医療費の高騰にともない診療  
報酬制度に医療費抑制を目的として「包括払い方式」  
が検討され、一部の病院で日本型「診療群別包括  
支払い方式」が実施されるようになってきておりま  
す。また、医療現場においては、Evidence Based  
Madcine(EBM)に代表されるように、基礎的かつ  
臨床的な根拠に基づいた医療が社会から求められて  
いることは、諸君が周知のことです。さらに、  
インターネットに代表される情報革命は益々その発  
展を速め、同時にヒトゲノム解析を含めた分子生物  
学の進歩は加速してきております。このように、先  
端医学の発展、細分化が進む中で、人間を客観的に  
分析する方向が進みすぎると、医療において全人的  
観点が失われる弊害が出てきています。どうか、患  
者さんに全人的医療の観点から接していただきたい  
と思います。一方これからは、あらゆる分野でグロー  
バルスタンダードが要求されてきます。これまで学  
生時代とは違い、自ら症例や、研究題目を通して学  
び、日進月歩の医学に遅れることなく、先頭を走っ  
ていただくことを期待しております。

私は医学部最後の2年間を担当という立場で皆さ  
んと接して参りました。大学に担当があるのは奇異  
な感じもしましたし、小中学校の担任とは異なり諸  
君に毎日接する訳でなく、また、忙しさもあって十

分に話し合う時間を持てなかったことが、少々心残  
りであります。

医学部が、他の学部と大きく性質を異にしている  
ことの一つに、卒業生のほとんどが、研究者を含め  
医学に携わることになり、他の業種に職を求めると  
は非常にまれな点にあります。従って、教官と学  
生、あるいは学生同志との関係は卒業で切れること  
なく生涯長く深くつながっています。この2年間、  
様々なことがあり、諸君達も様々な感慨を持って過  
ごしたと思います。私は担当として、諸問題に対し  
て逃げることなく、正面に向かい合って対応してき  
たつもりです。又、私は皆さんのことを、ただ単に  
教官と学生、あるいは担当と担当学年ということ以  
上に、皆さんとは将来一緒に仕事をする仲間という  
意識で接してきたつもりであり、教育してきたつも  
りです。今後とも、一緒に医学研究、診療、教育に  
一緒に努力していきたいと思っておりますのでよろしくお  
願ひします。

特に6年間一緒にいた仲間、同期は生涯友人とし  
て付き合うこととなりますので大切にしてください。  
私の経験からの同期の支え、アドバイス、諫言は極  
めて貴重なもので人生の転機に何度となく助けられ  
ましたので、卒業しても同期の友情を大切にしてく  
ださい。

さて、皆さんもご存知の通り、何度も述べました  
ように医学、医療を取り巻く環境は高齢化、少子化  
にともない大変難しい時期に来ております。どうか  
皆さんは、社会に対して責任ある職業人としての医  
師となり、同時によりよい医療を国民に提供出来る  
ように努力して下さい。

皆さんの前途に期待しています。

(産婦人科学講座 教授)



# 「第1期生への手紙」

看護学科第4学年担当 野村紀子

拝啓

一段と寒さが厳しい毎日が続いています。第1期生の皆様は、大学受験以来の熱心さで、国家試験のための勉強に取り組んでいることと思います。その姿を3階の学生ラウンジ、食堂、図書館、ゼミ室などで度々見かけます。また、授業には欠席がちだった人の姿も見られますので、よほど力を入れている感を強くしています。人間一生のうち、どこかで本気で勉強しなければならない時期がある、とよく言われますが、今がその時なのでしょう。体調には充分気をつけてがんばってください。

私は、この4年間走りながら、考えながらという「ながら族」で過ぎてしまいました。此処に至るまで、私自身も随分と勉強させられた感がします。それは、「知識」とは別の「智」です。人間一生が勉強である、と誰かの言葉にありましたが、まさにその通りでした。しかし、そうした勉強は私自身が望んだわけではありませんでした。人間一生のうち、知識を得るために本気で勉強する時期があり、また、生きていることが勉強し続けると言うことでしょうか。後者は時として辛いものです。これに耐えるには、頑強な身体と精神力が必要なようです。

第1期生の多くの皆様は臨床の場、あるいは保健所での仕事を望んでおり、道外、道内の各地で活躍することと思います。仕事の中で要求されるのは、単なる「知識」や「技術」がすべてであるとは到底思えません。仕事を続ける限り「知識」の勉強も必要となりましょうし、人間関係の中で得るものの中にも大切なものもあります。でも後者の方は自分自身が精神的にも肉体的にも健康でタフでなければ、正しくは受け止められません。また、精神的に落ち込むと、物事を前向きに捉えることが不可能になるやも知れません。

いままでは大学という枠の中で勉強してきたわけですが、これからは同じ看護職でも、勉強してきた環境の違い、人間関係の中で生じる葛藤・嫉妬・自信喪失・ねたみ・そねみなど数知れない、また見えないハードルを実感するでしょう。それらとの戦い

は、自己との戦いでもあるとも思います。誰も助けられないのです。ただ、心許せる友人や家族がその苦しさを理解し、分かち合ってくれるかも知れません。さらにそうした時、自己を客観視できること、人の意見に耳を傾けること、しっかりした自分の考えを持つことができるなら、人間としての魅力が増し、いつも輝いて仕事に打ち込める看護職へと自分を成長させることができるように思います。こうしたハードルの前で屈することは、自己の成長を止めるどころか、魅力のない人間として、あるいは常に人をうらやみ・ねたみ、その結果、周囲の人々から疎んじられるでしょう。また、卑怯な行動をとってしてしまうかも知れません。心が「ざらざら」していれば、心から患者さんに対峙することはできません。その意味において看護職である前に、一人の魅力的な人間として、自己の成長を主眼にしてほしいと思います。

第1期生の皆様が、今一様にスタートラインに立ち、障害物競走に望もうとしている様相が、目に浮かびます。どんな障害物であろうと、それぞれのやり方で突破してほしいと心から願っています。そして、人の心の分かる、相手の立場でものが考えられる感性を持った看護専門職者へと羽ばたいて下さい。

追伸、辛くなった時、悲しくなった時、いつでもここへ顔を出して下さい。元気を上げます。

平成12年2月3日・看護職の先輩・野村紀子。気温-20度の地にて。

(臨床看護学講座 教授)



## 「卒業にあたって」

医学科第22期卒業生 鴨嶋雄大



長い学生生活もあと僅かとなり、後は卒業と国家試験を残すのみとなりました。ここにきて学生生活を振り返ってみると、旭川医大に入学後、自分の過ごしてきた大学生活は、多少の躓きは有ったもの

の大変多くのものを得たとしても充実した日々だったと感じています。高校時代ろくに運動してこなかった私ですが、先輩方の甘い誘いにのってしまい、ルールもろくに知らないラグビー部に入部することになってしまいました。最初は医学部の部活だから…などと気楽に考えていたのですが、全く練習についていけず、筋肉痛の毎日でした。こんなわけで授業を受けに大学に行っているのか、部活をしに大学に行っているのか解からない日々が続きました。それでも3年生になる頃にはレギュラーとして試合に出るよ

うになり、やっとラグビーの面白さが解かり始め、この部活に入って良かったと思うようになっていました。他のスポーツと異なり15人と大人数でプレイするためチームワークが重要であり、1つのことに向かってみんなで何かを成し遂げるという貴重な体験を得ることができたこと。また、多くの仲間ができたことが部活動を通じて得た一番の収穫でした。

学業の面では1年から6年まで多くのことを学びましたが、特に印象に残ったのは臨床実習において教科書的には希な疾患とされる患者さんに実際数多く出会った事です。このことは一部の遺伝性若しくは強く習慣に依存するものを除けば誰もが患者になり得るという当たり前の事を再認識させてくれました。この認識の下、実際に自分が患者になった場合、何をしてほしいのか、また、どのような医師が必要とされているのかという事を常に考えながら患者さんに接していくつもりです。最後に、学生生活を支えてくれた両親、祖母、友人、お世話になった方々に心から感謝します。「本当にありがとうございました」

## 私が卒業を迎えられるのは…

医学科第22期卒業生 久米容子



思えば10年、随分長い大学生活を送ってしまった。医者を目指そうと決心した当初は「自分でバイトをしてでも医学部を卒業するぞ!」くらいの気合いがあったのだが、振り返ってみれば東海大地震が

来ないのいいことに(東海大地震で壊れたら実家は建てかえられる予定らしい)すねかじりまくりの6年間だった。ようやく(たぶん最後の)卒業式を迎えられるのは、そんな親や兄弟、また友人やその他たくさんの人達の助けがあったからだと心から感謝している。

私が旭医大に来る前に在籍していた某大学農学科のN教授もそんなお礼を言いたい人の一人だ。N教授はいつも立派な木のパイプで煙草をふかしており、愛敬のある人だったが話がとっても長かった。概し

て元気で農学を愛しているように私にはみえた。私が医学部再受験を決心したのは3年生の1月だったのだが、4年生になって卒論の実験がはじまり、周りの友人が大学院に進むとか就職するなど進路を決めはじめても私は教授にその事を言えずにいた。この講座にしながら教授が一生をかけた農学を捨て、違う道を目指す為に受験勉強をしたいなどと言ったら、きっと嫌な顔をされるのではと思ったからだ。教授はしかし、私が自分の希望を伝えるととても喜んでくれて特別に卒論の締切を受験日の後まで延ばしてくれた(まあ、特別な理由もなく就職して随分たつまで卒論を提出しなかった友人なんてのもいるので、どのくらい特別だったかは分らないけれど)。当時は色々な事に精一杯で特に感謝の気持ちを伝えるでもなく、あわただしく卒業してきてしまったけれど、今から考えると他の4年生とわけへだてなく応援してくれたその気持ちが大きな助けになっていたと思う。N教授は昨年退官され、今はもうあの講座にはいらっしやらないそうだが、晴れて医師として働ける事が決まった時は報告の葉書きを書いてみようかと考えている。

## 「発散と収束と」

医学科第22期卒業生 大藏 暁正  
(旧姓 李)



92年5月、僕は千歳空港にいた。所持金残高五千円余。アルバイト情報誌で住食完備のリゾートホテルを見つけ、札幌のオフィスで面接、即採用となり、新得に向かった。交通費自己負担で手元には煙

草代も残らなかった。

92年10月、僕は帯広に本社のある学習塾に採用され会社命令で旭川にやって来た。

93年10月、同社を退社し、当時はまだ交際中だった現妻の実家に「マスオさん状態」で住み込み受験勉強を始めた。

94年4月、旭川医大に入学、現在に至る。

と、箇条書きにすればほんの数行にしかならないが一つ一つのステップにおける葛藤と決断にはもう二度と味わいたくない程の苦渋なものがあった。およそ、この世界の事象は時間と空間という座標系の

中で過去のあらゆる可能性から現在の一点に収束し、未来へと発散していく底の抜けた砂時計のように思える。

どこかで収束するのは必然であるが、どこで収束するかは偶然である。人生の場合にはその人の境遇・経験・立場・能力・感情・判断等様々な要素が複合的に組み合わせられてその時その場の焦点を生みだしているのだろう。

北海道に来て8年。あの時の僕は自分がまさか8年後旭川医大の卒業生になっていようとは夢にも思わないただの放浪者だった。

この間のたった一つの出会いが欠けていたとしても現在の自分はなかったのだと思うと何だか不思議な気持ちになる。と同時に行間にしか登場しえない多くの人達との出会いもまた僕の心の中に温かく脈打っている。医師になるという大きな焦点に到ろうとする今、僕の場合この「出会い」という要素を決して看過することはできない。

少し遠回りしたがようやくスタートラインに立てた。次の大きな焦点はいつどんな形でやってくるのだろうか？身震いを覚えると共に大いに楽しみでもある。

## 「卒業にあたって」

看護学科第1期卒業生 大森真希



あっという間の4年間であった。もともと看護婦志望でなかった私にとっては、ただなんとなく合格が決まったから、という理由で入学してしまったが、今となっては、旭川医科大学に入学できて良かったと思う。入学当初は、「一期

生が、その後のその学部の校風を築くのよ」と聞かされ、プレッシャーを感じたことはあったが、私も含め看護科一期生達は、一期生としての不便さもありながら、それなりに努力してきたと思う。私達がそのような功績をあげたとは思わないが、一期生として「共に頑張ろう」というような団結力があり、仲の良い学年であったのではないかと思います。

私自身は、旭川医大で多くのことを学ぶことが出来た。4年前の入学式の時に、当時の学長が「勉強だけでなく、遊ぶなら遊ぶ、何かに没頭するなら没

頭する、ボーっと過ごすのではなく充実した学生生活をおくってほしい。」という言葉が印象的であった。医学系の学校で勉強も大変そうなイメージがあった私にとっては、この勉強よりも充実した生活に重点をおいた言葉はとても魅力的に感じ、今でも繊細に覚えている。そして実際に、私自身そのような学生生活を送れ、とても充実していた。道内各地を旅行したり、意味もなくロビーに出没し、友人と話をしたり、市内や旭川近郊を目的もなく車を走らせたり、毎日のように3-6へ遊びにでかけたりと、今思えばよくやったものだと思うようなことも、その時その時は本当に楽しく、充実した毎日であった。その中で、様々な経験をし、様々な人と出会い、多くのことを学んだと思う。まだまだ人間的にも、社会的にも未熟であり、今後多くの試練があるかと思うが、この4年間で得たものは、大きな基盤となると思う。

最後に、諸先生方、臨床でお世話になった先生、看護婦さんはじめ、共に学んだ仲間達、医大に通わせてくれた両親へ感謝の言葉を述べさせていただきます。本当に、心からありがとうございます。

## 「卒業にあたって」

看護学科第1期卒業生 永田恭子



4年前、大学受験に失敗し、たまたま募集が遅く4月に受験のあったこの大学の看護学科を「浪人はしたくないし、看護婦なら就職に困らなそうだし」という中途半端で甘く不届きな考えで受験し、入学

した私に待っていたのは、なかなかハードな日々でした。

今まで義務教育と高校の計12年間に培ってきた「暗記」のチカラよりも、「考える」ことや「発想の豊かさ」などの使ってこなかったチカラが求められ、おまけに「看護」は私が想像していたものよりずっと複雑で難しく、訳が分からなく困り果てました。実技テスト、レポート、実習、卒業研究と色々ありましたが、今考えても「よくやってこれたな」と思うことは多々あり、学校や病棟に行くのが嫌で嫌で

たまらない日もよくありました。

しかし、こんな日々を乗り越えられたのは一緒に頑張ってきた友人達がいたおかげでした。実技テストの練習に、みんなで冬休みに学校に通ったり、深夜に誰かの家に集まってレポートを書いたり血圧測定の実習をしたり、何かが一段落する度に「打ち上げ」をして語り合ったりと、常に周りに友人達がいて互いに励まし合い、助け合い、一緒に学んできました。要領の悪い私が困っている時にはアドバイスをしてくれたり、実技の実習が上手く出来ない時には最後まで練習に付き合ってくれたり、助けられることも沢山ありました。この大学に入学し、良い友人達と出会え、一緒に学んでこれたことをとてもうれしく思っています。

卒業後、就職して今度は「看護婦」として病棟に出るのは嬉しいやら怖いやら、なんだか複雑な気分です。きっとこれまで以上に大変な事や辛い事に直面することもあるでしょうが、その時はまた、この友人達と語り合いでもしながら乗り越え、互いに成長していければいいなと思います。

## 平成11年度 博士学位記受領者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
本田 光 則	課程博士	平成11年 6 月30日
生田 克 哉	課程博士	平成11年 6 月30日
池袋 弘 範	論文博士	平成11年 6 月30日
岡本 哲 軌	論文博士	平成11年 6 月30日
中谷 和 宏	論文博士	平成11年 6 月30日
早川 拓 治	論文博士	平成11年 6 月30日
塩越 隆 広	論文博士	平成11年 6 月30日
名取 俊 介	論文博士	平成11年 6 月30日
前田 高 宏	論文博士	平成11年 9 月30日
太田 勲 男	論文博士	平成11年 9 月30日
松坂 知 行	論文博士	平成11年12月25日
伊藤 正 春	論文博士	平成11年12月25日
幸村 近	論文博士	平成11年12月25日
竹川 政 範	論文博士	平成11年12月25日
小谷 裕 美	論文博士	平成11年12月25日
竹内 昌 之	論文博士	平成11年12月25日
大島 美 保	論文博士	平成11年12月25日
槌谷 恵 子	課程博士	平成12年 3 月24日

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
蓮池 史 画	課程博士	平成12年 3 月24日
石本 隆 広	課程博士	平成12年 3 月24日
籠川 浩 幸	課程博士	平成12年 3 月24日
片山 隆 行	課程博士	平成12年 3 月24日
上林 哲 子	課程博士	平成12年 3 月24日
金 殷 鉄	課程博士	平成12年 3 月24日
竹田 眞 純	課程博士	平成12年 3 月24日
長岡 泰 司	課程博士	平成12年 3 月24日
長 峯 正 泰	課程博士	平成12年 3 月24日
郝 双 林	課程博士	平成12年 3 月24日
吉川 賢 忠	課程博士	平成12年 3 月24日
芝木 泰一郎	課程博士	平成12年 3 月24日
東 信 良	論文博士	平成12年 3 月24日
小笠原 正 洋	論文博士	平成12年 3 月24日
高橋 悟	論文博士	平成12年 3 月24日
坂井 博 之	論文博士	平成12年 3 月24日
竹原 有 史	論文博士	平成12年 3 月24日
和田 佳緒利	論文博士	平成12年 3 月24日





# 退官にあたり教官の 総合的業績評価を考える

解剖学第二講座 教授 松嶋 少二

先日、「退官にあたって」という内容の原稿の依頼がありました。当初は今日までの出来事を中心にまとめようとも思いましたが、この際、自分をこれまで育ててくれた旭川医科大学に少しでも役に立つことをのべるほうがよいのではないかと考え直し、「教官の評価」について記すことにしました。

今日、社会における大学の役割が厳しく問われ、社会に対する責任を明確にするためには大学および大学教官の点検評価は不可欠であるという考えが支配的になっております。本学においてもすでに10数年前から旭川医科大学年報として点検評価の結果を公表してまいりました。しかしながら、本学では、おそらくほかの多くの大学でも同様でしょうが、教官の評価の対象は教育、研究および管理運営のうち主として研究に限定され、教育や管理運営への貢献はほとんど考慮されていないのが現状であります。わが国の大学教官は非常にいそがしく、会議や講義の合間をぬって細々と研究を行なうしかありません。休祭日を実験や論文作成にあてている教官も少なくありません。まして、教官の業績が厳しく評価され、そのうえ、研究業績のみが評価されとなれば、教官は多くの時間を主として研究に費やし、教育と管理運営への自己の責任を十分果たす努力を怠るようになるのは止むをえないともいえます。このようなアンバランスを是正するためには、大学教官の業績評価を、教育、研究および管理運営のすべての活動に対して総合的に行なう必要があると思われま

す。このような観点から、本学でも、教官の教育および管理運営への貢献度を評価するための具体的方法を検討する準備をはじめてもよいのではないかと考えられます。教育および管理運営のいずれの場合でも、評価は定量的に具体的な数値で表す必要があります。

## 1. 教育活動に対する評価

総合生命科学など複数の教官が関与する授業科目をまとめるコーディネーターの役目は重要です。総

合的な授業科目が本来の成果をあげることができるか否かはコーディネーター次第でほとんど決まるといってもいいでしょう。したがって、これを担当した教官には高い評価が与えられてしかるべきです。一人の教官が行なう講義・実習の場合は、実施された時間数を評価の対象とします。この場合、履修要項に記載されている時間ではなく教官が実際に行なった時間を用います。さらに、学生の各教官に対する評価も当然考慮する必要があります。

## 2. 管理運営活動に対する評価

現在本学にある各種委員会の重要度、年間開催回数などを考慮し、委員会の順位を決めます。入試・教務・厚生補導等の委員会は当然上位にランクされます。順位に応じ点数を与えます。動物実験施設、実験実習機器センター、RI研究施設、情報処理センター等の各施設の長、学年担当、入試問題作成を担当する教官などには高い評価が与えられます。

## 3. 評価の活用

これらの評価の結果をどのように活用するかはもっとも重要です。評価の結果が適正に活用されなければその価値は失われます。近い将来、本学においても講座研究費の配分方法がこれまでとは変る可能性があると聞いております。教育や管理運営への貢献度のほかにさらに研究業績評価を加えた総合的な業績評価が、研究費の配分の際の参考資料として用いられるほど正確なものになれば、教育、研究、管理運営の三者のバランスは明らかに改善されると思われま

す。本文をまとめるにあたり、この方面のエキスパートで、「教官の総合的業績評価」の問題を検討する北大の全学的組織の責任者でもある北大医学部阿部和厚教授の関連論文2篇を参考にしました。わが旭川医科大学が全国一の特色ある医科大学として高く評価される日が訪れることを期待しております。



## 守 拙 求 真

細菌学講座 教授 東 匡 伸

昭和48年(1973年)9月25日、紛糾した「国立学校設置法等の一部改正案」(所謂“筑波法案”)が半年遅れで参議院本会議で可決成立し、9月29日に同法案が公布施行されたのにもない、同日付で、私は本学細菌学講座担当を命ぜられた。爾来26年6ヶ月、無我夢中で教育・研究に従事し、こゝに定年退官を迎えるに至った。文字通り、光陰矢の如しの26年6ヶ月であった。同僚教官、教室構成員、事務官、そうして学生、卒業生諸氏の、数限りない多くの方々のご協力を戴き、私の人生における社会的役割を終えることができたことに、心からの御礼を申し上げ度い。

こゝに、最終講義で使った表題を再び使わせて戴く。「守拙求真」は、彫刻家平櫛田中氏(1872~1979、東京芸術大学名誉教授、1962年文化勲章受賞)が、生前愛されていた言葉である。木彫刻の真髓を極められた氏も、生涯、自らの技を拙ないものと見詰め、より遥かな美の真実を求め続けられた。氏の彫刻とこの言葉に接して、私は大きな感動を覚えた。常に自己に厳しくあれとの教えである。

旭川医科大学において教育に携わってきて、今日此の頃想うことは、1期生から凡そ10期生の頃までは、私は教育に喜びを覚えていたことである。“自ら学ぶ”態度が、各学年に漲っていたと思う。特に強く印象に残っているのは、1期生、2期生の数名が、期末試験で合格点に達していながら、己が満足する結果を示し得なかったので、再試験を受けることを願い出て来たことである。私は彼らに、「点取り虫」になるなと忠告したところ、彼らは「点取り虫ではありません。自分の実力を試したいのです」と言ったので、「再試験で90点以上取らないと留年させるぞ」と言い渡して、再試験の受験を認めた。結果は全員90点をクリアーし、最高点は98点であった。満点を与えてもよかったが、敢えて小さなミスで2点減点したことを想い出す。この様なことばかりではなく、当時の学生諸君の多くが、各自思い思いの講座・学科目の研究室に、放課後出入りし、教官と語り合い、教官の研究の見学や手伝いをし、また、小さなテーマを与えられて、研究らしきこと(?)に熱中していた。

しかるに昨今の学生には、最低の努力で、最低の合格点を取って進級すること、所謂“低空飛行”で卒業することを願っている(?)学生があまりにも多い。因みに、今年の細菌学期末試験の最低合格点も、下げざるを得なかった。この現状を嘆かわしく思っているのは、私独りであろうか?

すべての学生諸君は優秀な頭脳の持主である。しかるにその頭脳を使うことをせず、唯々安易な道を選ぼうとしている。世に名高い非凡なる才能の持主は別として、所謂秀才と称される学生も、劣等生と蔑まれている学生も、同等の頭脳の持主であり、唯、己に厳しいか否か、意欲があるか否か、努力しているか否かの違いと、私は常日頃から信じている。

“自ら学ぶ”厳しさと意欲と努力の違いである。単に講義・実習をpassiveに受けるのではなく、そこに疑問点を見出し、activeに“自ら学ぶ”ことなくして、学ぶことの面白さは生まれず、意欲も生まれない。学生諸君は面白く教えてもらうことを要求するが、面白く教えてもらって学ぶ? 冗談ではない! 先達が刻苦して知り得た自然の理を、面白おかしく教えてもらって学ぼうとは、言語道断である。先達が苦しみ知り得た自然の理を、自ら苦しんで学ぶことなくして、自然の理を本当に理解できようか?

己に甘く、意欲と努力の喪失の原因はどこにあるのであろうか? 家庭を含めた社会環境の変化による一般現象——現代の甘えの構図——が大学に持ち込まれているのか? 大学におけるカリキュラム(人的資源、教育媒体を含む)に問題があったのであろうか?

昨年から、本学のカリキュラムの大改革がなされた。tutorialとearly exposureの教育システムが大きく盛り込まれ、各教科目も総合生命科学として、大きなテーマに統合されている。すばらしい改革で、カリキュラム作成に尽力された教育課程編成小委員会(2号小委員会)の先生方の御努力に、心からの敬意を表し度い。この新カリキュラムによって、学生の“自ら学ぶ”自己に対する厳しさと、意欲と努力が生まれることを、退官に当って、心から期待するものである。



## 退官にあたって

小児科学講座 教授 奥野 晃 正

私は昭和49年4月に旭川医科大学に参りました。以来16年余を助教授として過ごしました。教授職を務めたのは10年弱に過ぎません。最初の研究室は旭川市立病院に間借りをした暫定施設で、仕事は小児科学講座の基本設計を考えることでした。現在の医大宿舎C棟に寝泊まりし、朝には暫定施設に出かけます。午後は会議のため緑が丘の大学管理棟に呼び出されます。近くに食堂はありませんでしたから、夜は再び街まで出かけて夕食をとり、その後医大宿舎に戻るといふことも度々でした。研究棟ができあがり、宿舎、市立病院、大学の間を行ったり来たりせず生活できるようになったときの嬉しさを今でも思い出します。

機器センター整備の一環として、放射性同位元素研究施設をつくることになり、第一種放射線取扱主任者の試験を受けることになりました。僅か3か月ほど泥縄式の勉強をして、8月の猛烈な暑さのなかで、脂汗と冷や汗を流しながらの受験でした。どうやら合格し、当時の山田守英学長が大変喜んで下さったことは懐かしい思い出です。開設当時から一緒に仕事をした技官達とは今でも仲間意識があり、遠慮のない話ができるので時々無駄話をしに行くことがあります。気持ち良く仕事出来る雰囲気はこれからも続くことでしょう。現在は様々な機器が所狭しと並んでいますが、当時は建物が出来ても測定機器は少なく、口の悪い先生からダンスホールにでも使うのかとからかわれたものでした。

附属病院開設に先立って診療記録の様式についての議論があり、各科の助教授、看護婦、事務官の共同作業で、一患者・一診療録の考えから現在の診療録を作り上げました。一患者・一診療録のPOS、SOAPのシステムは、平成2年に病院がオーダリングシステムを採用する際にも役立ちました。実際に附属病院が開設されたのは昭和51年11月です。小児

科の最初の当直を引き受けましたが、患者に異常の起きようはずもなく、瞬間湯沸かし器の種火をつけるのが唯一の仕事でした。

小児科では低身長患者を中心に内分泌疾患の診断と治療に力を入れることにしました。ヒト成長ホルモン製剤が使用できるようになった時期に当たり、開院と同時に次々と成長ホルモン分泌低下症の患者が入院し、治療を始めることができました。それ以来、成長ホルモン分泌不全の患者が多数集まり、全国的に注目されるようになりました。このような患者を長期間にわたり経過観察した結果、最近になって幼児期から思春期にいたる下垂体・性腺系の成熟について論文をまとめることが出来ました。

小児の肥満が社会的に問題になり始めたのも、大学創設の時期とほぼ一致します。小児の肥満が将来の成人病につながることから小児成人病と呼ばれるようになり、さらに最近は小児から老人までを含めて生活習慣病の名称が用いられるようになりました。初期は小児肥満の疫学調査から始め、保健行政との関わりも多くなりました。厚生省の班研究に参加する中で、幼児の体型を縦断的に評価する方法として、身長と体重の関係を数式化し、さらにグラフ化することを提案し、母子健康手帳に採用されました。新しい母子健康手帳に「幼児の身長体重曲線」が掲載されています。このようなものが欲しかったという声が多く、小児保健に役立っています。

最近の2年間は心身症の調査と対策に取り組みました。平成12年度には沖助教授を中心に全国調査のまとめをする予定です。社会的に関心の高い問題です。立派にまとめてくれるものと期待しています。学内の皆様の支援をお願いします。

振り返ってみると学内の多くの方に助けられ、教室の若者たちに助けられた26年です。有り難うございました。



## 細胞・DNA・蛋白の狭間で

生化学第二講座 教授 鈴木 裕

昨年8月1日付で生化学第二講座の教授を拝命いたしました。私は昭和56年3月東京工業大学総合理工学研究科生命化学専攻博士課程を修了し、Boston Biomedical Research Instituteの研究員を経て、昭和60年11月本学・生化学第二講座に助手として赴任いたしました。大学院とBostonでは、平滑筋収縮制御の分子機構、特にミオシンの分子特性について研究を行ないました。本学では、前教授・金沢徹先生の御指導のもと、小胞体Ca<sup>2+</sup>ポンプの研究を行なって現在に至っております。蛋白こそ変わりましたが、共にATPを利用したエネルギー変換系で、その分子機構について研究してまいりました。

細胞には様々なイオン輸送系が存在して、細胞の生存と機能に必須なイオン環境を整えています。その中でも、ATPをエネルギー源として小胞体にCa<sup>2+</sup>を汲み上げるのがCa<sup>2+</sup>ポンプです。Ca<sup>2+</sup>は細胞機能発現のスイッチの役割を果たしています。小胞体に蓄えられているCa<sup>2+</sup>がチャンネルを通して細胞質に流れ込むことにより、例えば筋肉では収縮が始まり、Ca<sup>2+</sup>が再びポンプにより小胞体に回収されることにより、弛緩します。細胞の種類に依存した独特で巧妙なCa<sup>2+</sup>シグナル、例えば受精の瞬間に卵子で見られるようなCa<sup>2+</sup>ウェーブ、の形成もまたチャンネルとポンプの共同作業によってなされています。一方、高濃度の細胞質Ca<sup>2+</sup>は細胞毒となって細胞死につながってしまいます。細胞質Ca<sup>2+</sup>レベルの調節はこのように細胞に必須の課題です。またごく最近、Brody病やDarier病の原因はCa<sup>2+</sup>ポンプ遺伝子の変異であろうと報告されて、細胞Ca<sup>2+</sup>代謝の僅かな乱れが重篤な病態につながる事が示唆され、遺伝子変異とポンプ機能異常との関連を解明することが急務になっています。

現在では、細胞中の特定分子の挙動をある程度観察できるようになり、また、DNA・RNAについての詳細な情報が入手可能となって、細胞機能の仕組みをかなり深く推察できるようになりました。しかし、実際に細胞の機能を司っているのはDNAによって設計され発現した個々の蛋白であり、従ってこれ

ら蛋白の機能とそのメカニズムを理解することなしに、細胞機能について語ることはできません。いわゆる蛋白屋さん、酵素学・速度論屋さん、といったタイプの生化学者はごく限られた種類の蛋白・酵素について深く追求するがゆえに、現代の流れからは少し離れた存在としてとらえられがちです。生化学の専門誌Journal of Biological ChemistryやBiochemistryでも、細胞レベルの観察やDNA・RNA解析の論文が急増し、逆に蛋白化学・酵素学的な論文は激減しています。蛋白・酵素について深く理解するための膨大な種類の実験を行なっている時間がないというのも事実かも知れません。

個体・細胞、DNA・RNA、そして蛋白・酵素といった全てのレベルから総合的に生命現象について解析を進めることができる大きなラボは別として、普通は自分達がどのレベルを主体として研究を進めるか、ある時点で決断しなければなりません。私達は、個体・細胞やDNA・RNAについての情報を基礎に、遺伝子工学や細胞分子生物学などにおける最新の手法も駆使して蛋白の構造と機能およびその異常についての理解を深め、それを蓄積することによって、細胞機能と病態についての理解に貢献したいと考えております。

毎土曜の8時30分から昼まで行なわれるオープンセミナーには、現在、数名の本学学生の方々や、北大、教育大、名寄短大などから先生方、大学院生が参加しておられます。興味のある方はどうぞ気軽にお訪ね下さい。蛋白の構造と機能、メカニズム、機能異常の解析という、地道で難しい、しかし不可欠で深遠な研究に興味を抱いてくれる仲間が増えることを心から期待しています。大発見の女神が微笑む一瞬を逃さぬよう、そして、発見した現象に関しては緻密に実験を進めてその意義を明らかにし生命現象を理解するよう、一同張り切っています。本学においても、教育や研究を取り巻く環境は大きく変化していますが、講座全員、本学のために努力していく所存でおります。ご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。





## 教授就任挨拶 — 全人医療と予防医学 —

衛生学講座 教授 吉田 貴彦

2000年1月1日付けで衛生学講座を担当させていただくこととなりました。私は小樽で生まれ育ちましたが、神奈川県での生活が長く23年ぶりに北海道に戻りました。1996年の初夏に旭川で日本産業衛生学会が山村晃太郎名誉教授によって開催され私も参加しましたが、その当時には私がこの地に赴任することになろうとは夢にも思いませんでした。

今も昔も医学部卒業後に基礎医学を志す者は多くありません。私は医学部卒業後すぐに大学院に入り衛生学の道を選びました。私が衛生学を選んだ理由は2つあります。一つは現代の臨床医学が専門化しすぎ、患者全体を対象として接する全人医療がなされ難いことへの反発でした。しかし、せっかく学んだ医学を活かしたいという思いが残りました。そこで病を得た患者ではないにしろ生身の人間と接する機会のある衛生学に可能性を探りました。もう一つは、私の成育環境です。私はクリスチャン・ホームに生まれ育ちました。父は研究生活を望んだそうですが祖父の願いで小樽の地に開業していました。40周年となった昨年7月に閉院するまで、弱みを負う患者の立場に立った奉仕精神に基づく全人医療を実践する姿を見ることが出来ました。クリスチャンであることがなされた業かと思えます。この父から時々予防医学の大切さを聞かされておりました。誰しも人間は健康でありたいと願ひ、病気になりたくないのです。WHOの定義にあるように、健康は身体的、精神的な要因だけでなく経済的要因によっても害され、また病気になると経済的に困窮します。すなわち病気を予防することが最も人間の幸福に貢献できると考えることが出来ます。あらゆる意味で弱い立場にある者が健康を害しやすい事実があることから、そのような人々に奉仕できる予防医学としての衛生学にやりがいを見出そうと思いました。

さて、旭川医科大学の創設から四半世紀が過ぎました。この間、医療を取り巻く環境の変化や少子化にともなう受験生の減少など医学部が直面する状況は厳しさを増し、生き残りをかけた変革の時を迎え

つつあります。旭川医科大学でも具体的に様々な試みがなされ始めています。旭川医科大学が患者や社会から評価を得て存在意義を認められるために必要な条件を総論的に言うならば、より良い医療人を輩出することに尽きると思えます。ここで、私が教育に携わってきて気がついたことを述べてみます。最近の学生さんは知識を詰め込むことに躍起となり、ともすれば暗記に走りがちに思えます。しかし、コンピューターが発達した現代では人間がいくら努力しても暗記に関してコンピューターには敵いません。しかし暗記力に優れたコンピューターでも患者を診察し治療方針を決定することは出来ません。コンピューターは病態(病気の状態)を診断し、それに対応した治療方針を選択するだけです。そこには対象としての患者が存在しません。一方、医師は患者を人間全体としてとらえることと、人間的思考をすることが出来ます。これによって初めて、生身の人間である患者の正しい診察と治療方針の決定ができます。学生さんは無機的で非人間的なコンピューターが行う暗記と病態のみを見て患者を診ない態度に走るべきではありません。患者を診て教わることの方がはるかに大きな意味を持ちます。また、今までに培われた学問としての知識や技術、先輩医師の教えや行動は尊重こそすれ、何の疑いもなく暗記、模倣すべきものではなく、自分なりの思考を加えることが必要です。そして何よりも患者の人格を含めた人間全体に対応できる全人医療を身に付けることが大切でしょう。学生さんは、人の苦しみを理解し、苦しみからの解放と苦しみの予防のために、人々に奉仕できる医療人となり、臨床、予防医学、医療行政、教育、研究の現場に赴けるように努力すべきですし、教員はそれを助けなければなりません。旭川医科大学がこのような医療人を多く輩出できるならば、おのずと道は開けると思えます。私も良い学生さんを育てられるよう微力ながら努力させていただきたいと願っています。



## 就任のご挨拶

心理学 教授 高橋 雅 治

昨年12月より本学一般教育心理学を担当することとなりました。現在は、4月から始まる講義と実習を充実させるための準備に追われています。本稿では、自己紹介を兼ねて就任のご挨拶を申し上げます。

旭川は、小学生の頃住んでいたこともあり、私にとってなじみ深いところです。研究室の窓から大雪山の美しい山並みを眺めていると、町外れの野山で昆虫や魚の採取に熱中していた日々が昨日のこのように思い起こされます。

高校時代を仙台で過ごした後、大学進学のため再び北海道に戻ってきました。大学では、多くの研究者たちが様々な研究に取り組んでいることを知りました。さらに、大学院では研究の面白さに強く惹かれるようになり、科学的な問題の解決に対する研究者の熱中は、昆虫や魚の採取に対する子供の熱中と類似しているのではないかとさえ感じるようになりました。この時期に科学的な問題の解決に十分に熱中することができたことが、その後研究者の道を選ぶことになった理由であると思っています。

ところで、問題解決についての心理学的な研究では、「試行錯誤」と「洞察」という考え方が古くから重要視されてきています。ここで、試行錯誤とは、ありとあらゆる方法を試みることにより適切な解決方法を発見する行動です。たとえば、チンパンジーが実験室内の天井の高い所に吊されているバナナをとるために、ジャンプする、床に置かれた箱にのる等の様々な行動をひとつひとつ試すことにより、最終的に天井のバナナをとるための有効な方法を発見するという行動がこれに相当します。

また、試行錯誤の過程で、箱を動かす、箱にのる、ジャンプする等の様々な行動を十分に体得しておく、それらの行動をうまく並べ替えることにより、全く新しい解決方法が生まれることがあります。これを心理学では「洞察」と呼んでいます。たとえば、チンパンジーは、天井のバナナをとる場面で、突然、部屋の隅に置かれている箱をバナナの真下の位置まで移動し、その箱の上に乗って、そこから手を伸ばしてバナナをとる、という行動を示すことがあります。試行錯誤と洞察の関係は今でも心理学の重要な

研究テーマです。

一方、人間の問題解決には、「教示による解決」も含まれています。教示による解決とは、解説書を読んだり、その問題に精通した人間に有効な方法を教えてもらうことによって、問題を解決する行動です。たとえば、昆虫採集の得意な友達に取り方のコツを教えてもらう行動がこれに相当します。

教示による解決のメリットは、なんといっても効率が良いことです。何故ならば、無駄な行動を行うことなく問題を解決することができるからです。しかし、教示による解決は、事態の急激な変化に対応できない、というデメリットを持っています。たとえば、友達に昆虫の上手な取り方を教えてもらったとしても、その友達がいない時に、何らかの原因（たとえば気象の変化等）で、教えてもらった採集方法が通用しなくなってしまうと、もはやお手上げです。

一方、試行錯誤で覚えた行動は、一旦形成された後も変動しやすいため、場面の変化に対応しやすいことが多いようです。たとえば、ある時点で今までの昆虫採集方法が通用しなくなると、問題を解決するために、さらに多様な行動が自発され、その中のどれかが新たな解決に結びついて行くわけです。

科学的研究では、これらの解決行動のバランスが重要です。どの分野でも、たくさんの知見が論文という形で累積されています。ですから、そこに書かれている教示に従わずに、すべてを試行錯誤や洞察に頼って解決しようとしても、研究は遅々として進みません。しかし、教示に頼っているだけでは、先人の研究を多少変えただけの、いわゆる二番煎じの研究しかできません。独創的な研究によって新しい知識を生み出すためには、試行錯誤や洞察による研究がどうしても必要となります。

科学的な研究は、面白くやりがいがある反面、しばしば効率が悪く、かつ、先の見えない厳しい道でもあります。四月から担当する講義と実習では、そのような研究の面白さと厳しさの両方を学生のみなさんに伝えることができると考えております。皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

## 1年を振り返って

### 医学科第1学年 後藤 祐也

四月から旭川での大学生活がはじまった。この一年の生活は目新しいものが多く退屈しない一年だったと思う。

平成11年度からの新カリキュラムで1年目から専門的なことを学んできたのだが、理解したり覚えたりすることはとても難しくかなり苦労した。

講義等で学んだことも多いと思うが、この一年、最も自分のためになったのは、たくさんの人との出会いだと思う。大学では部活の人でも同じ一年生の人でも全国から集まり、年齢も今までの経歴も様々な人がいる。中には考え方の合わない人もいるのだが、どんな人であってもその人から教わることはたくさんあると思う。今までの自分の考え方を見直すことも何度かあった。たった一年でも多くの人に会うことができた。大学を卒業するまでにたくさんの

人に出会っていくのが楽しみだ。

来年度からは今年度以上に専門的な勉強が増えて、大変になっていくのだろう。一年を終る今になって、やっと普段からの勉強が大切であることがわかってきた。入学した頃は、少しずつでもいいから普段から勉強をしようと思っていたのだが、部活などを行っているうちにその決意はどこかへいってしまっていた。最初の意志を貫くことは難しいことも実感した。こんな講義は必要ないと勝手に投げ出しそうになったこともあったが、どんな勉強でも、一生懸命やることで、いつか自分の気がつかないところで役に立つこともあると最近思うようになってきた。昨年決意した思いを今年には実行していきたいと思う。

この一年間を振り返ってみて、学ぶことも多くあったが、改善すべき所も多く見つかった。これからの大学生活で何度も自分自身を見つめなおすことが大切だと思う。人との出会いや大学の講義でさらに自分自身を向上させていきたいと思う。

## 1年を振り返って

### 医学科第1学年 高見 麻衣子

入学してから早くも1年が過ぎようとしています。毎日が何かと忙しく、本当にあっという間の1年間でした。

私は北大の医療短大を卒業後、検査技師としてある脳外科に就職しました。しかし実際病院で苦しんでいる多くの患者さんに接し、技師として自分ができる仕事に限界を感じて、「行動は早い方がいい」と医大受験を決めてしまいました。仕事をやめるわけにもいかず、結局去年の3月まで働きましたが、毎日患者さんに接するたび医師になりたいという気持ちも強くなり、運良く1年で合格できました。

医大に入学した時は、「1年目だからほとんど教養科目だろう、早く進級したいな」と少なからず思っていました。でも今年から新カリキュラムとなり、

早くから臨床の内容に触れる講義が多く、とても充実した授業内容でした。多くが医療短大で学んだ事だったので、再び違う先生に習うことにより、知識の定着をはかることができました。

特に印象に残った授業は、やはりチュートリアルです。ディスカッション形式の授業で、少人数で調べた事や疑問点等を話しあうことにより、自分の勉強不足を実感でき、自己学習へとつながりました。受け身の講義よりも、学生が直接参加できる形のチュートリアルの方が楽しいし、知識もよく身につくと思います。もう3年次までないということなので、とても残念なのですが…。

6年間の学校生活は長そうですが、こうして毎年1年1年があっという間にすぎ、案外短かいのかもしれません。1日1日を大切にして勉学に励み、よき医師を目指して頑張ろうと思います。

## 北海道での1年を振り返って

看護学科第1学年 酒見佳奈

九州人の私にとって、北海道は憧れの地でした。そんな土地で、いっぱい雪や友達に囲まれて、もう一年がたとうとしています。その前、大勢の先輩の部活の勧誘に圧倒されながら入学したばかりなのに、今ではもう新歓委員となって仕事をしています。一年がこんなにも早いと感じるのは、私にとって充実していたからかもしれません。憧れの北海道に住み、素晴らしい友達や先輩に出逢い、様々な体験ができました。新歓合宿で潰れたり、初めてスキーをしたり、部活で皆と勝利を喜びあったりと、私にとって新鮮な経験ばかりでした。講義の方でも、解剖の実習・ユニフォームを着用しての実技や実習などは興味深いものでした。新しい事づくしの一年であったし、様々な事を考えさせられる一年でもありました。初めて親元を離れたことで、両親のありがたみが分

かったし、自分の事について考える時間が多い年でもありました。この一年で私は自分がどれだけ成長したのかは分かりませんが、この恵まれた環境で様々な事を吸収し、そして卒業する頃に入学当時の自分を振り返って成長したなあと自分で思えるようになりたいです。そのためにも一日一日を大切に充実した学生生活を送れるようにこれからより一層努力します。

最後に、私が充実した生活を送れるのは私を支えてくれる人がいるからという事を忘れないようにしなければならぬと思います。私を北海道にまで出させてくれた両親、私の事を支えてくれている友達、様々なアドバイスをくれる先輩方に感謝しています。この一年だけでなく残りの三年間も充実した生活を送ることができるように、そして私を支えてくれている人に感謝することを忘れる事なく有意義に過ごしたいと思います。

## 1年を振り返って

看護学科第1学年 吉永ひいな

会社をやめて、大学生になったこの一年間と言えは聞こえがいいかもしれないが、実際の私は全く違う。

進学したいと思いながら続けていた浪人生活に挫折。フリーターとプータローを繰り返す日々を過ごしていた。

そして就職。ある病院で医療事務として働いた。そこで医療現場を見た。何もかもが衝撃的だった。命の尊さ、儚さを感じるうちに、自分のやりたいことと事務の仕事のギャップが次第に大きくなっていった。そのうち、看護婦になりたいという夢を思い出し、「今しかない」という思いがとてもの大きくなった。9月末に辞表を出し、一か八かの賭に出た。世の中は就職難だ。もしダメだったら、またゼロからのスタートになるということも覚悟した。

私の執念に負けたのか、その賭が吉と出て、私の大学生活がはじまった。大学には、私の予想をはるかに超える素敵なことがたくさん待っていた。

一人一人名前をあげて紹介したいくらい最高の同じ看護を学ぶ仲間たち。時には厳しく、熱意を持って接して下さる先生方。完成したばかりの看護棟。テスト前に仲間たちと集まっての勉強。サークルでの先輩たちとの交流。どれもこれも私がずっと夢見ていたことだった。こんな一年を過ごせるとは、前の私には全く想像つかないことであった。

こうして一年間を振り返ってみると、やっと何かに辿り着き、自分の居場所を見つけたような気がする。「今しかない」という気持ちを信じて、大学受験を決意して、本当に良かったと思う。

これから、あと3年間の大学生活を自分なりに一生懸命学び、素敵な仲間たちといっぱい笑って泣いて過ごしていこうと思う。



## OSCEと臨床実習

医学科第5学年 和田直樹

私達は、昨年10月のOSCEを経て、現在臨床実習を行っています。後輩の皆さんの中にも新聞などで旭川医大で初めてそのような試みが行われたことを知っている人がいるでしょう。一体そのOSCEを経るまでに何を学んだのでしょうか。

1つは、血圧の測り方、聴診器の使い方（心音・肺音の聴き方）、神経の診察方法などです。もう1つは、今までは問診と呼ばれていたもので医療面接の行い方です。これらも学生の間で医師役と患者役を決め、要は「お医者さんごっこ」をして、その中で患者さん側の気持ちを考えていこうというものでした。

身体所見をとる方は正しい知識と方法を学び、練習すれば出来るようになるものだと感じました。それよりも重要で難しいのが医療面接です。患者さんがどうして病院に来て、何に困っているのか、そし

て、どうして欲しいのか、それを医師側が患者さん側の立場になって考え、聞き出すことをするのです。これは医師にとって当然なことなのですが、それが行われていないことが実際の現場ではあるのです。皆さんの中にも自分が患者として病院に行ったとき、医師に不平・不満を持ったことがありませんか？そこで患者さんに不満を持たせないような医師とは？ということを考えるようになったのです。

OSCEをクリアして現在臨床実習を行い、医療面接を行うことがありますが上手くいかないことが多いです。実際の患者さんは個人個人性格が異なるし、聞いて欲しいこと困っていることも当然違うのです。緊張しているということもありますが、学生間での「お医者さんごっこ」と現実が違うのです。ではOSCEは意味がなかったのかというと全く逆で、OSCEを行ったことで医療面接を行うたびに患者さんの立場になったかどうかを再確認できると思います。これは医師になってからも同じなのではないでしょうか。

## OSCEを終えて

医学科第5学年 節家麻理子

旭川医科大学にOSCEが導入されると聞いた時、私の心の中は「やっと…」という気持ちと、「導入される学年にあたれて良かった。」という気持ちがありました。他の医大に通う何人もの友人からOSCEの存在は聞いていたので、それなくして臨床実習に入る旭医のカリキュラムにいささか疑問をもっていました。それだけに、私にとっては嬉しい報せでした。

“臨床実習序論”は、身体学的所見のとり方に関する講義・実技に始まり、医療面接のロールプレイ、その他救急診断や保健制度、臨床薬理学などを2週間で学習・習得し、さらにその最終日にObjective Structured Clinical Examinationを受けるという、かなり内容の濃い、ハードなものでした。しかし、これを通じ私達の中に「とうとう臨床に出る」という実感が湧いたように思います。

OSCEを終え、臨床実習に入った今、OSCEの有用性をひしひしと痛感しています。患者さんとの接し方や、コミュニケーションの採り方、身体学

的所見の採り方などまだまだ未熟で、患者さんには不快な思いをさせていることも多々あると思います。これで更にOSCEがなかったら…と思うとぞっとします。どれだけ患者さんに負担をかけることになっていったかと。

今回OSCEを我が大学で導入し、第一回目を終えた今、改善すべき点は様々見つかったと思います。しかし臨床実習にはいり、私達自身OSCEを体験できてよかったと実感していますし、なにより患者さんに少しは「最近の医大生は何かが違う」と感じていただけているのではないかと思います。今年度の反省を踏まえ、来年度は更に充実したOSCEになることを願っています。そのためには、なにより学生の意識が大切です。私達の学年が良い手本となっているかは私達自身には判断しかねますが、少なくとも“臨床実習序論”が始まり意識が一変したことは下の学年にも伝わっていることと思います。せっかく始まったOSCE、これからは是非継続して頂きたいと思います。

最後に、無知の私達に、お忙しい中時間を割き、一から熱心に教えて下さった諸先生方に深くお礼を申し上げたいと思います。



## 退職にあたり開設当時を振り返って

保健管理センター 保健婦 玉川 憲子

昭和59年4月12日、保健管理センターが設置され、所長代理に副学長の石井兼央先生が就任され、5月保健婦として採用になり、この3月定年退職することになりました。振り返ってみますと、まだ建物もなく現在の医療研で使っている室が保健室で、そこでスタートしました。8月初代所長に保坂教授が発令になり、5科の非常勤医も発令され、翌年3月カウンセラーの酒木講師が着任、と同時に建物が竣工し、ようやく体制が整いました。健康相談日は、内科が毎週水曜日の昼休み、他は精神科・整形外科・眼科・耳鼻咽喉科で月1回でした。開設当初より春から夏迄は、5・6月の感冒とスポーツ外傷。10・11月と1・2月は感冒又はインフルエンザの流行で、高熱者が出る度に内科医に電話で応急手当の指示を受け、先生の手がすいた時に診察に来て下さったり、担当医がいない時は、医局で責任を持って対処して下さる等、先生方には大変御協力を戴きました。又病気や怪我で本人が動けない時は、センターが2階にあるため学生課の方々に来てもらい、担架で1階

に降ろし、ストレッチャーで病院へ運んだり、常食が食べられない学生には、学生食堂にお願いして、おかゆを作ってもらう等多くの皆様に御協力を戴きました。因みに初年度の利用者は、2,350人、60年度、3,697人、61年度、4,609人と増加してゆきました。毎日の業務に追われながら、感冒や怪我で気軽に利用してもらう事が、センターの敷居を低くする、それが大切だと酒木先生と話し合いました。現在は歴代の所長を中心に関係者の努力により、毎日昼休みに来所すれば、医師の健康相談、応急手当が受けられます。私にとって、青年期の唯中にいる皆さんと関わった16年は、人が自立してゆく中で、喜び、悲しみ、苦しみ、悩みながら成熟してゆく、大学生だから持てる贅沢な時間に寄り沿うことだったと思います。どうぞ健康に留意され、人を愛し、心優しい医療人になって下さい。最後にセンターの関係者は基より多くの方々に暖かい御指導・御協力を戴き本当に有難度うございました。

## 研究室紹介

### 内科学第三講座 助手 蘆田 知史

医局長となってから、第三内科がどのような講座・診療科であるのか、問われることが多い。私は自分の医局を紹介するとき、いつも使う言葉がある。それは、「懐が深い」という言葉である。

第三内科の「懐の深さ」のひとつは、診療・研究の分野が、消化器病学・肝臓病学、血液病学・腫瘍学、代謝病学に及ぶことである。現在の医局の診療・研究班の構成は、上部消化管グループ、下部消化管グループ、胆・膵グループ、肝臓グループ、血液グループ、代謝グループで構成されており、各々のグループ名から想像されるすべての疾患を診療現場で取り扱うとともに、それぞれのグループに大学院生がおり、研究を行っている。

第三内科の「懐の深さ」のふたつ目は、高後 裕教授の人脈の深さ、コラボレーションの多様さである。現在、アメリカには第三内科より9名に上る留学生が派遣されている。彼らは、それぞれ西海岸、東海岸に分散しており、研究テーマも多岐にわたっているが、それは各々の出身診療グループの違いによる。彼らの留学先の教室には、必ず教授をはじめ、各々のグループのスタッフが年に1-2度訪問し、共同研究に関する情報の交換を行っている。国内でも、大学医局、民間研究機関などと多くの臨床研究、基礎研究の分野で共同研

究を行っている。

第三内科の「懐の深さ」のみつつ目は、第三内科を構成している人々のキャリア、人間性、性格、および人生の目標が実に様々であることである。第三内科を訪れた方なら、いろいろな人間が集まっているのをご存じだろうと思う。一例を挙げれば、シモネタが得意なJW先生は、数年前に東京大学の大腸腫瘍外科・内科の先生方に早期大腸癌の見つけ方を講演してきた程の実力の持ち主であるし、「high-low, high-low, 3内ハイロー」などと超音波内視鏡について講義しているYS先生は、ハーバード大学の客員教授である。教科書に載るような仕事をするのが大事だといつもおっしゃっている教授の夢は、リタイアしたらカリフォルニアの海岸に住むことらしいが、その日はまだまだ遠い。多士済々の第三内科は、今日も賑やかである。



## 「新歓合宿」のお知らせ

新歓実行委員委員長 藤谷 好弘

毎年恒例「新入生歓迎合宿」を4月8日・9日に今年も行うことになりました。

まずは学内で、各クラブが新入生に対してアピールするクラブ紹介を行います。恥を捨てて体をはったものから素晴らしい演奏まで、我目立たんとアピール合戦が繰り広げられます。入部したい部活の候補がたくさんできて困ってしまうかもしれません。

その後、舞台は神居観光ホテルへ。いよいよ合宿も本番。自己紹介やゲーム、上級生との談話を通して交流を深めたり、さらには各クラブが乱入し、一変して新入生争奪の戦場と化すでしょう。最後は新入生と新歓委員で大いに、語って、盛り上がりましょう。

我々新歓委員は新入生が来るのをまだか、まだかと楽しみにしています。有意義な合宿にしたいので、多数の参加をお待ちしています。

## 学生証兼ネームカードのID化に伴う学生証の更新について

平成12年度から学生証とネームカードを併用してID化を図り、図書館及び情報処理センターにおける特別利用カード等の互換性をもったものとして学生証兼ネームカードのID化を実施することになりました。

については、新学生証兼ネームカードを作成しますので、写真（上半身、脱帽、正面向き）を4月14日（金）までに学生課に提出願います。

なお、現在使用している学生証及び図書館利用カードについては、6月以降使用不可となりますので注意してください。

（学生課）

## 平成12年度 日本育英会奨学生の募集について

日本育英会では、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する学生は、提出期限までに所定の書類を学生課専門職員に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、専門職員に相談してください。

## 平成12年度 前期分授業料免除及び延納・分納について

平成12年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課専門職員から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要は次のとおりです。

- \* 経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ、学力優秀と認められる場合
- \* 授業料納期前6ヵ月以内において学資負担者が死亡、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合

なお、免除基準及び申請期間については、公用掲示板に詳しく掲示してありますのでご覧ください。また、不明な点は、専門職員に問い合わせ願います。

# 平成11年度

# 1年のあゆみ

## 【4月】

- 9日 平成11年度入学式  
医学科新入生 96人  
看護学科新入生 60人  
看護学科第3年次編入学生 10人



入学式

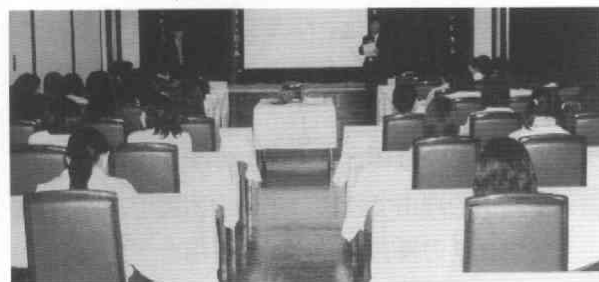
- 22日 医師国家試験合格発表  
本学合格者 91名  
合格率 84.3%

- 19～20日 医学科新入生研修



医学科新入生研修

- 22～23日 看護学科新入生研修  
(於 大雪山白金観光ホテル)



看護学科新入生研修

## 【6月】

- 18～20日 第25回 医大祭  
医科festa'99 ～開かれた扉

- 30日 博士学位記授与式  
博士学位被記授与者 6人



第25回 医大祭

## 【7月】

- 9～11日 第46回北海道地区大学体育大会  
当番校：北海道大学

本学参加種目：陸上競技（男女）、準硬式野球、ソフトテニス（男）、バスケットボール（男女）、バレーボール（男女）、サッカー、卓球（男）、バドミントン（男女）、剣道（男女）、弓道（男女）、ハンドボール（男）

成績：第3位 卓球（男）

総合成績：男子7位、女子7位



地区体

- 7月22日 第42回東日本医科学生総合体育大会  
夏季大会

～8月10日 主管代表校：東京女子医科大学  
本学参加種目：陸上競技（男女）、準硬式野球、テニス（男女）、ソフトテニス（男）、卓球（男女）、バレーボール（男女）、バドミントン（男女）、サッカー、バスケットボール（男女）、柔道、剣道、弓道、空手（男）、水泳（男）、ハンド



ボール（男）、ゴルフ（男女）、ラグビー  
成績：優勝 バドミントン（男子）  
第3位 弓道

【8月】

- 10～25日 第33回全日本医科学生体育大会王座決定戦  
主管校：東京女子医科大学  
27日 外国人留学生夏季オリエンテーション（大雪窯他）  
参加者 留学生7人、留学生家族9人



外国人留学生夏季オリエンテーション

【9月】

- 8日 体育大会（学生主催）  
総合1位 看護学科1年  
2位 医学科1年、医学科4年  
22日 平成12年度解剖体慰霊式



解剖体慰霊式

- 30日 博士学位記授与式  
博士学位被記授与者 2人

【10月】

- 2日 平成12年度看護学科第3年次編入学者選抜試験  
10月6日 平成11年度公開講座  
～11月1日 「老年医学の最前線」  
（於 ニュー北海ホテル）  
13日 平成12年度看護学科第3年次編入学者選抜試験合格者発表



公開講座

【11月】

- 5日 本学記念日  
27日 医学科推薦入学者選抜試験  
28日 看護学科推薦入学者選抜試験

【12月】

- 8日 看護学科推薦入学者選抜試験合格者発表  
20～21日 スキー教室（於 富良野スキー場）  
25日 博士学位記授与式  
博士学位被記授与者 7人  
12～3月 第42回東日本医科学生総合体育大会  
冬季大会  
主管代表校：東京女子医科大学  
本学参加種目：スキー（男女）、アイスホッケー

【1月】

- 15～16日 平成12年度大学入学者選抜大学入試センター試験

【2月】

- 8日 医学科推薦入学者選抜試験合格者発表  
10日 大学院入学者選抜試験  
17日 東 匡伸 教授最終講義  
18日 松嶋少二 教授最終講義  
23日 大学院入学者選抜試験合格者発表  
25日 平成12年度入学者選抜第2次試験（前期日程）

【3月】

- 2日 奥野晃正 教授最終講義  
6日 平成12年度入学者選抜第2次試験（前期日程）合格者発表  
12日 平成12年度入学者選抜第2次試験（後期日程）  
16日 退官教授歓送式  
22日 平成12年度入学者選抜第2次試験（後期日程）合格者発表  
24日 平成11年度学士学位記授与式  
学士学位被記授与者 164人  
（医学科 103人、看護学科61人）  
博士学位記授与式  
博士学位被記授与者 19人

## 学生団体の設立・継続 届けについて

平成12年度において、団体活動を継続しようとする学生団体または新しい団体を設立する予定の学生は4月28日(金)までに設立・継続届を学生課に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は解散したものと取り扱いますので注意してください。  
(学生課)

## 教官の異動

採用	12.1.1	衛生学	教授	吉田 貴彦
辞職	12.1.15	第3内科	講師	大平 基之
昇任	12.1.16	第3内科	講師	斉藤 裕輔



## 窓 外

外科学第一講座 助教授  
稲 葉 雅 史

### 旅 立 ち

この四月より大学を離れ、市立根室病院に赴任することになった。「かぐらおか」への最初の寄稿が挨拶状となるとは思っても見なかったがこれも時の運であろうか。旭川医科大学の大部分の診療科がまとまって新たに一つの自治体病院を運営していくのは開学以来初めてのケースであり画期的な出来事であるが、診療面でも何か斬新なものを提供したいものである。ところで私自身根室市は道内で唯一訪れたことのない市であり、その理由は広大な北海道の中でひたすら東端に存在するためであり、初日の出詣でを含むこの地域の観光には特別の興味がなかったからである。しかし、あらためて自分の新しい生活の場となる根室市周辺を地図でじっくり観察して驚いた。その遠さをあらためて認識したこともさることながら、友好国ロシアの異常な近接状態とこの地域の特徴的地形である。根室市は大平洋に突き出た半島のほぼ中ほどに位置しており、その根部は温根沼(オンネトー)を境にたった2kmほどしか本土と陸続きの部分がないのである。NHKの天気予報を見ている限りはもっと根元に近い部分に存在する

ものと安心していましたが、地震の多い地域でもあり容易に離島化しそうである。また、息子から借りた帝国書院の中学校社会科地図P110には根釧台地に乳牛を示す牛のマークがぎっしり埋め尽くされており、本土とは牛の国で完全に隔絶されている。野付半島から根室半島にかけての妙に湖や沼の多い特異な地形は、数年前に居住していた米国コネチカット州のとなりマサチューセッツ州のCape Codと非常に似ており興味深い。緯度的にも1度ほどしか変わらず両地域とも暖流と寒流のぶつかるあたりに存在し有数な魚場となっている。大きな違いはあちらには地震がないことと飛行場があちこちに点在し主要な交通機関となっていることであろうか。話しがすっかり学術的な方向に進んでしまったが根室市のこの地理的、精神的遠距離感は何とか解消できないものであろうか。旭川医科大学で推進する遠隔医療(Telemedicine)のモデルケースとして注目される病院であることもなるほどなずける。さまざまな希望と不安が錯綜するが、いずれにせよ市民は本年四月から始まる我々の医療に期待と懐疑感をもって待っていることは間違いなく、近隣諸国を含めたこの地域の基幹病院となり得ればおもしろい。当初はまず市民の信頼を得ることに力を注ぐことになりましたが、病院運営の本格化に伴い今後各診療科の多数の先生にお世話になるものと存じます。その折は御支援のほどよろしくお願い申し上げます。では牛の国の隣国でがんばって参ります。